

「若者たちのいま」 を考える

第1回

9月7日 **土** 開講式 12:50～13:00

- 13:00～15:00 洞澤 伸(言語学)
「親疎の意識」を基軸とする若者たちの言語行動
- 15:15～16:45 近藤 眞庸(健康教育学)
変容する、若者の性意識と性をめぐる関係

第2回

9月14日 **土**

- 13:00～14:30 土岐 邦彦(発達心理学)
障害をもって青年期を生きる
- 14:45～16:15 南出 吉祥(教育学)
若者支援の現在

第3回

9月21日 **土**

- 13:00～14:30 立石 直子(法学)
若者の恋愛トラブルをめぐる法的問題とその背景
- 14:45～16:15 内田 勝(英文学)
三四郎のモテキー TVドラマ『モテキ』を通して
夏目漱石『三四郎』を読む

第4回

9月28日 **土** 閉講式 16:15～

- 13:00～14:30 柴田 努(経済学)
経済のグローバル化と若者の労働環境
- 14:45～16:15 伊原 亮司(社会学)
若者たちの労働者生活の変化



会場 岐阜大学地域科学部(岐阜市柳戸1番1)
1階 地101教室

受講対象者 高校生以上の一般市民
(関心のある方なら、どなたでも受講できます。)

定員 50名
(定員を超えたときは、お断りすることがあります)

受講料 7,200円(学生 6,000円)
(納入後の受講料はお返しできません)

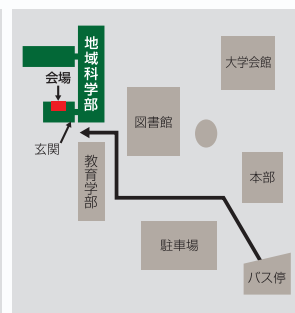
その他 3回以上受講された方には修了証書
(岐阜大学)を授与します。

申込み方法 受講を希望される方は、「住所・氏名・年齢・電話番号」を明記の上、郵送・持参・FAX・E-mailのいずれかの方法により、下記へお申込みください。受講料納入方法(銀行振込)については、お申込みいただいた後にご連絡いたします。

手話などの別途対応が必要な方は、お申し込み時にご相談下さい。
ご連絡いただいた皆様情報は、公開講座の目的に必要な範囲内において使用致します。ご自身の個人情報の開示・訂正・削除を希望される場合には、下記にご連絡下さい。

申込み期限 8月16日(金)

申込み先・問合せ先 〒501-1193 岐阜市柳戸1番1 岐阜大学地域科学部総務係
TEL : 058-293-3003 FAX : 058-293-3008 E-mail : chiiki@gifu-u.ac.jp



第 1 回 9 月 7 日(土) 開講式12：50～13：00

13：00～15：00

「親疎の意識」を基軸とする若者たちの言語行動
洞澤 伸(言語学)

近年、若者たちの対人コミュニケーションは、日本の社会的環境変化の中で程度の差異を伴いながらも大きく2つの方向に二極分化してきています。一方の極は「ひきこもり」をその「極地現象」とする「距離をおく若者たち」、他方の極は「脱社会的存在」をそれとする「距離をおかない若者たち」です。両者には、他者に対して適切な「心的距離」（他者に対する心理的な距離感）をとることができない《他者不在》という心性が共通して見て取れます。その二極分化の中において、特に「タメ口」「敬語表現による拒絶」「バイト敬語」という現代の若者たちに特徴的な3つの言語行動（言葉遣い）を位置づけて考察します。そして、それらが他者に対する「親疎の意識」を基軸とするほぼ一貫したものであることを示します。また、なぜ「親疎の意識」が若者たちの言語行動の基軸となるのか、それを日本社会および若者たちの人間関係と心理に関係づけて述べてみたいと思います。

第 2 回 9 月14日(土)

13：00～14：30

障害をもって青年期を生きる 土岐邦彦(発達心理学)

生きづらさを抱きながら日々の生活を送らざるをえない現代。そのなかで障害をもって生きる若者たちには独自の困難さがあります。キャリア教育の推進は障害児教育においても同様で、彼らは目に見える変化を性急に求められています。とにかく役に立つ技能を、あるいはふさわしい態度を身につけさせようという教育的意図が彼らにふりかかります。その反面、彼らの想いやねがい、すなわち自己の内面の考慮は意図的に無視されているのが現状です。しかし、彼らにだって青春時代を謳歌したいという欲求があります。学び、働き、友情を育み、そして恋もしたい、という当たり前のねがいを抱えています。本講義では、私が日常的につながっている若者たちの演劇活動の取組みを紹介しつつ、親子関係、異性への想い、時間的展望をキーワードにしながら、障害をもって青年期を生きる困難と喜びを論じたいと思います。そして、障害をもつ若者たちの発達と自立の方向と一緒に考えてみましょう。

第 3 回 9 月21日(土)

13：00～14：30

若者の恋愛トラブルをめぐる法的問題とその背景
立石直子(法律学)

「誰かを愛する」って、素晴らしいこと。でも、その「誰かを愛する」心が引き起こす行動が、「愛する誰か」を傷つけるとしたら、被害者には大きなトラブルになります。ストーカー事件、デートDVと言われる恋人間の暴力…。ニュースや新聞では、若い世代の恋愛をめぐる事件が後を絶ちません。実際、10歳代、20歳代での交際相手からの被害経験は、10%を超えています。また、警察が把握するストーカー事案についても 20歳代の被害が多く、その半数は交際相手や元交際相手によるものです。

従来、法は、夫婦や恋人など私的な関係に起こる問題に対し、不介入を貫いてきました。しかしながら近年、こういった親密な関係における暴力が、ようやく深刻な人権問題として認識されてきました。講座では、実態について紹介するとともに、これらの問題に対応する法制度について解説します。また、このテーマの背景にあるジェンダー問題についても触れてみたいと思います。

第 4 回 9 月28日(土) 閉講式16：15～

13：00～14：30

経済のグローバル化と若者の労働環境
柴田 努(経済学)

経済のグローバル化と国民経済をめぐる問題は、グローバルに展開する企業の利益と国内経済の利益ははたして一致するのか、という論点をめぐって論争が行われてきました。しかし、近年この乖離が激しさを増しています。つまり、グローバル企業の利潤の増大が、国内経済の活性化につながっていないのです。資本にとっては、もはや国内と国外という市場の区別は意味をもたなくなりつつあるのです（例えば、ユニクロを運営するファーストリテイリング社長の柳井氏は「外需も内需もない」、「世界同一賃金を導入する」と発言しています）。

グローバル競争のなかで国内の労働条件は悪化しますが（「底辺への競争」）、この影響は特に若い世代の失業率の上昇、非正規雇用の増加、労働条件の悪化（ブラック企業の増加）として現れています。講座では、パブル崩壊後、若者の労働環境がどのように変わり、それが経済のグローバル化とどのような関係にあるのか、ということを検討します。

15：15～16：45

変容する、若者の性意識・性行動と性をめぐる関係
近藤眞庸(健康教育学)

「性の低年齢化」「活発な性行動」という、近年、“枕詞”のように語られてきた現代の若者像が、いま修正を迫られています。「性の消極化」と表現されるような事態が、いま男女を問わず起こってきています。いわば、『「草食化」の傾向が、若い男性だけでなく、女性でも進んでいることが見て取れる』（片瀬一男）ということです。

いつ頃からなのか？ その背景（要因）は何か？
講義では、日本性教育協会が 1981年以降、ほぼ6年間隔で実施してきた「青少年の性行動全国調査」（第1回～第7回）結果を手がかりにして、若者の性意識・性行動と性をめぐる関係が 10年前から大きく変容してきている実態を確認したうえで、日本の若者の生と性をめぐる課題について、教育学の視点から講究していきたいと思います。

14：45～16：15

若者支援の現在
南出吉祥(教育学)

「フリーター」「ニート」など就労問題をその典型として、「大人になること」の難しさが多方面で広がっています。従来までの「大人」モデルが通用しなくなってきたと同時に、社会の実情に即したオルタナティブも見出せずにいる状態が続いていて、その狭間で多くの若者が生きづらさを抱えながら生き残り競争に追い立てられているという現実があります。

こうした現状に対し、この回では、とりわけ困難な状況に追い込まれた若者たちへの支援の実態から迫っていきたいと思います。「支援」というと、どうしても「ごく一部の者」向けのものと捉えられがちですが、実際には緊急避難的な対応だけでなく、社会全体の不安定化・解体状況に抗するような普遍的意義を持ちうる実践が展開されていたりもします。そこで本講義では、現在各地で試みられている支援実践に通じる根底的な理念・社会観を追うことにより、「大人になること」を支える社会的基盤そのものについて探っていきたいと思います。

14：45～16：15

三四郎のモテキ——TVドラマ『モテキ』を通して
夏目漱石『三四郎』を読む
内田 勝(英文学)

大根仁の脚本・演出による TV ドラマ『モテキ』（2010年放映）、およびその原作となった久保ミツロウの漫画『モテキ』（2008～10年雑誌連載）は、どこか夏目漱石の『三四郎』（1908年新聞連載）を思わせる物語です。どちらの作品でも、華やかな文化に憧れて地方から上京した純朴な青年が、東京でさまざまな人々と出会いながら、都会にも自分の才能にも失望しかけて悩み、異性と不器用な関係しか築けない自分にいら立ってじたばたしています。23歳の小川三四郎を主人公とする物語には、彼が憧れる海外の文学からの引用が散りばめられている一方、29歳の藤本幸世を主人公とする物語には、彼が愛する日本のポップカルチャーからの引用が散りばめられています。彼らを翻弄する女性たちもまた、いかに生きるべきかに迷っているところも、両者に共通した特徴です。百年の時を隔てた二つの物語を比較することで、「若者たちのいま」と「若者たちの普遍」を同時に探ってみましょう。

14：45～16：15

若者たちの労働者生活の変化
伊原亮司(社会学)

日経連（現・日本経団連）は 1995年に「新時代の『日本的経営』」を打ち出し、雇用の「柔軟化」と働き方の「多様化」を推進しました。しかし、現実には、働き方の選択の幅が広がるだけでなく、雇用環境や労働条件の悪化が待ち受けていました。なかでもその変化を直に受けたのは若者層です。一方で、「新しい富裕層」の仲間入りする若者たちが増えていますが、他方で、学校から会社への移行のルートから降りる人が目立ちます。15～24歳の非正規比率や失業率が急激に高まり、ニートや引きこもりの数が増加しています。「終身雇用」を保障された世代との経済格差は大きく、世代間対立が深刻化しています。しかも問題は雇用と賃金だけではありません。働く場において、雇用の急激な「多様化」は様々な軋轢を引き起こしています。本講義では、若者層を中心に、働き方の「多様性」の実態をミクロの場からみていきたいと思います。